

# 後悔と確信

賛助会員 中村 寿徳

自分は昭和40年代の生まれですので、先の大戦は経験していません。それでも物心ついた頃、気になったものは山肌に残る大型爆弾の弾痕、使われなくなった旧軍の高射砲陣地などでした。

紀伊は、明治以降主流から遠ざかったという経緯もあり、中央に対しあまり好意的でない土地柄でしたが、それでも、旧軍主導の製油所の建設には協力的で、土地供出運動等を行ったと聞きます。その製油所というのは航空燃料及び潤滑油生産の拠点で、当然、戦時中は敵の攻撃に晒され、激しい爆撃を受けた様です。当時の写真を見る限り、防空部隊の活躍で多くの爆弾が離れた所に落ちるばかりで簡単には破壊されず、施設を守る鉄筋コンクリートの壁には無数の弾痕が残るも貫通にはならなかった様です。

そのせいか、旧軍と共に戦ったという感すらあります。防空網により爆撃機の侵入可能な方位が限定されるので、古くからの住宅地への誤爆は少なかった様ですが、火災により多くの家が焼かれ、製油所の近くでは爆弾が

防空壕を直撃し、避難した人々が全滅する惨事も起き、女子挺身隊の朝礼で敵機の機銃掃射を受け叔母の学友が被弾したり、私を通った学校の恩師は小学校に敵機からの機銃掃射を回避しながら登校したこともあったそうです。また、幼かった父は疎開していました。伯父は終戦間際に予科練を受験したとの事。

そんな土地柄でしたが、幼少の頃、お寺にやや大きく高い同じ形の墓石が二十程並んでいて、いつも、どこかのお婆さんが清々しい顔で墓参りをしたりしていました。不思議な事に離れた別の墓にも花を供えたり、親族等でないと思われる人が、自分達の墓参りの後、手を合わせたりにしていました。

自分の曾祖母に聞いたところ、それはシナで亡くなった人達の墓で、地域毎に部隊を纏める陸軍の慣習から、この地域は、兵役と言えば戦車、戦地と言えばシナであったので、殆どの戦死者はシナの戦いで亡くなった人達だったそうです。近所のお婆さんの次男もシナで戦車のハッチから身を乗り出して周囲を警戒しようとしたところ、銃撃を受けて亡くなったのだそうです。また、別な墓にも花を供えていたのは、自分の息子と仲の良かった友達達の墓であろうとのことでした。シナでの戦いは現代風と言えば対テロ戦争の様相も

あって、別な意味で苦しい戦いでもあった様ですが、私達の故郷にあっては、ある者は大東亜の平和安定の為に、ある者は男子の責務である兵役全うの為、義勇あるいは責任感を持って挑んだ様です。戦地に我子を送った母親達も、「息子は務めを果たした」と清々しく潔いものでした。

しばらくして、私は受け入れ難い説に直面しました。私が小学生の頃、学校教育でも、言論人の言説でも、「帝国陸軍がシナで蛮行を重ねた」という説は、批判する事を禁じられた教義の如く扱われておりました。

…それは偽りである  
にも関わらず…

そう、それは偽りであるのに、戦後言論界の人々は何も見ず、何も調べず、「帝国陸軍は領土的野心に基づき支那を侵略し、各地で虐殺、強姦、略奪を繰り返した」などという嘘を撒き散らしていました。

それは虚構でした。なぜなら、日本の陸軍は地域毎の編成であるので郷土の同期先輩達と一緒に行動することになり、秩序のある村社会が、そのままの秩序を保って出征する訳です。到底、秩序ある村社会で育ち、期待されて出征した二十歳位の若者が、一年や二年で「村の恥」と言える様な悪党に成り下がるなどということは信じる事が



写真・横浜市鶴見区の杉山神社末社の石碑

出来ず、嘘をついてもつき通せるはずもなく、そして、自分の耳で聞いた年寄り達のあらゆる話が、全く「先人達の蛮行」なるものを想起させるものではなかったからです。したがって、私は自分の故郷から出征した人達の行動を疑うことはありませんでした。少なくとも自分の故郷の人達に関しては。しかし、後悔を感じ、恥じた部分もあります。自分の故郷の人達を疑ったことはないものの、どこかに「他の地方の人なら、どうか分らない」という穿った見方は、なかったと言えは嘘になります。ただ、それも、ある時、神奈川で地元の人々によって支えられている神社の末社の「此ノ御社ハ支那事変 大東亞戦争テ祖国ノ平和ヲ求メテ戦死シタ三百数十柱ノ英霊ヲ慰メルタメ(後略)」と由緒を書き示した石

碑を見て、清く拭われました。仏式と神式、紀伊と武蔵の土地の違いがあっても、やはり、同じ日本人なのだから、同じ心を持っているし、戦地に行った人達も、やはりそうであろう、つまり、私の故郷の先人達と同じ様に清く出征した人達だったに違いないと確信しました。「日本人がシナで蛮行」など、有り得ない事だと。